

音楽をつくって 表現しよう

いろいろな音素材でつくる

●自然の中にある音

教室から外に出ると、そこはいろいろな音素材の宝庫だ。小さいころ、その音たちに耳をそばだてていたことを、思い出したい。原っぱで、河原で、公園で、そんな自然の中で、太古の昔から人々が遊んでいたであろう、音遊びを再認識することは、外で遊ぶことのなくなった最近の生徒たちにとって、とても必要なことだと考える。

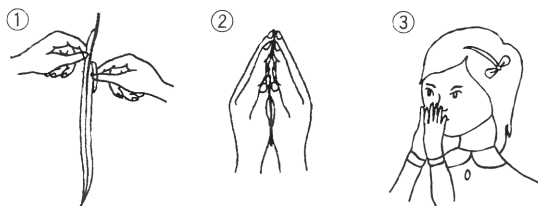
●草笛を鳴らす

自分の息を使って音を出すことができる草笛は、自分で音をつくるという点において、工夫と創造活動ができる素晴らしい教具になりえる。また、何よりも手軽に多様な楽器がつくれ、発音原理についても学ぶことができる。

●シングル・リード

「キジ笛」「柴笛」は、1枚の薄い葉っぱを使って鳴らす草笛である。

まず、簡単に音を出せる「キジ笛」だが、①薄く細長い葉っぱの葉脈を外し、幅5mmほどに縦に裂く。②この葉っぱを図のように親指と親指の間に挟む。③親指のすき間を思い切り吹くと音が出る。葉っぱを上下に引っ張る力を変えると、音域を変えることができる。うまくすれば、3オクターヴもの音域が出せ、大概の曲を演奏することができる。また、その手をラップ型に少し広げると、音が大きくなり、開いたり閉じたりして音量を変えることができる。この笛は紙でも代用できる。



次に教科書にある「柴笛」だが、両手の親指と人さし指で葉っぱを押さえ、唇に当てて音を鳴らす。「キジ笛」に比べ難しいが、こちらも音階を吹くことができ、練習によっては曲も吹けるようになる。初心者のうちは、柔らかい葉っぱを使うと、音が出しやすい。

●ダブル・リード

教科書にある「葉巻き笛」は、葉っぱを先端から巻いて管にし、その一方をつぶし、葉っぱが重なった間から息を出し、その振動で音が出る草笛である。

かなな屑やストローでも同様に音が出せ、これらの発音原理は、オーボエと同じである。

●草笛遊びの発展

竹を使い、穴を開け篠笛をつくったり、トランペットのように唇の振動で吹いたり、いろいろ工夫させたい。また、薄い葉っぱを唇に当て声を出してカズーをつくるなど、他にも自然にあるものを使い、様々な楽器を創作させてみたい。

●私たちを取り巻く音について考える

「音」と「無音」の関係は、音楽において、とても重要な要素となる。私たちが暮らしていく中の、いろいろな音について考えてみたい。

私たちを取り巻く音には、自動車の音、飛行機の爆音、テレビのトーク、ゲーム機の音などの人工的な音がたくさんあり、静寂というものを忘れがちである。

しかし、よく耳を澄ますと、自然の音の中に、風のざわめき、波の音、虫の鳴き声などが、響き続けている。

音楽は無音から始まり、無音に終わるが、この心地よい「無音」というものについて、考えさせたい。また、恐怖からくる「無音」もあることに気がつくのと、すてきな音楽環境を意識するきっかけともなる。

具体的なフィールドワークとしては、地域の地図の上に、音の出ているようすを書き込んでゆく「サウンド・マップ」づくりや、屋外へ音を録音に行くなどがあげられる。これらの実践をすることによって、意外な音に気づくことができる。また、それらを構成し作品とすることもできる。